

食糧問題から見る昭和史

白木沢旭児(北海道大学大学院文学研究科)

北大総合博物館・土曜市民セミナー 2013年1月12日(土)

はじめに

- ・ TPP 参加問題→日本の農業、日本国民の食料をどのように維持するのか、が争点
- ・ かつて、日本国民がもっとも食糧不足にあえいでいた時期、いかにして食糧問題を克服したのか？

1. 戦後の食糧危機

①食糧危機の深刻さ

- ・ 「1,000 万人餓死説」(資料①) …実際に死者が続々と出ていた。アメリカの認識によると日本人は1日 900cal、米軍兵士は 5,000cal。

②危機を救った食糧援助輸入

- ・ 「輸入総額に占める食糧輸入額の割合」(資料②) … 1946、47 年は**輸入総額の過半が食糧**。その後も 50 年までは 4 割台。

・ 「食糧輸移入数量」(資料③) …戦前の姿を示す 1934～36 年平均では米が圧倒的に多く、これは植民地であった朝鮮、台湾からの「移入」による。移入とは、国内移動と同じ扱いで関税は掛からない。46 年からは米が激減し大麦、小麦が増大、46～48 年の米、大麦、小麦はすべて「援助輸入」。援助輸入は主としてアメリカから無償で麦類がもたらされる。

- ・ マッカーサーが日本への援助に反対する米本国世論に対し説得した論法「食糧暴動が起これば鎮圧するために米兵増派が必要となり、そのためには一人 5,000cal の食糧が必要になる。それよりも安い。」

- ・ 資料③の数字を追いかけると

米は 54 年まで増えて以後減少

大麦は 56 年まで増えて以後減少

小麦は表示した最後の年である 59 年まで増加傾向

穀物計(上 3 つの計)は 55 年をピークに以後減少

戦前と戦後を比べると主食(穀物)輸移入量は増大し、内容が**米を移入していた構造から小麦を輸入する構造に変わった**。

③危機を救ったヤミ米

- ・ 1,000 万人餓死説がささやかれたものの、実際にはそれほど大量の餓死は出さずに食糧危機は緩和に向かう。援助輸入の麦類に加えて、ヤミ米の存在も大きい。

・ 農家は安い公定価格で供出に出すことを渋り、高いヤミ価格で販売。公定価格も年々引き上げられたのでヤミ価格との差は縮小した(資料⑤)。

- ・ 「配給辞退」が目立つのも、ヤミ米でまかなえていたから。また、外米は評判が悪かったことがわかる(資料④)。

2. 戦前から戦後の食糧消費パターン

①戦争の前後で一貫した傾向

- ・食料の種類別に国民1人当たり供給量指数（≒消費量）を見ると戦前・戦後を通して増加したもの…牛乳、食用油、魚介、卵、肉など。
減少したもの…雑穀（粟など）、はだか麦、甘藷など。
停滞しているもの…米、大麦など。（資料⑥）
- ・これを食料の分類で表すと
増加したもの…副食類、砂糖（戦争時の中断があるが）
減少したもの…穀類・いも類
- ・日本人の食生活は穀類・いも類など主食中心から主食+副食品という形態に変わっていた。これを「戦後食糧消費パターン」と名付ける。

②国民所得に比例する食糧消費パターン

- ・資料⑧の1953～55年の1人1日当たり1682calは、戦前に比べて下がった（副食品が増えたため）数値だが、これを1956年について国際比較すると
穀類・いも類のカロリーは27ヶ国中、エジプト、トルコ、に次いで多く、カロリー総計に占める穀類・いも類比率は、日本が第1位（ワースト1位）となる（資料⑦）。
- ・この表は、もともと国際連合食糧農業機関(FAO)が作成したもので、27ヶ国は1人当たり国民所得の高い順に並んでおり、カロリー総計に占める穀類・いも類比率は国民所得に反比例することが実証されている。
- ・戦後食糧消費パターンが見られたものの、1950年代の到達点は最貧国なみ。→食糧消費を発展途上国型から先進国型に変えることが至上命令に。

③米食の功罪

- ・なぜ日本人の食生活は発展途上国並なのか？＝米を主食としているから。**米食批判(米食偏重批判)**が巻き起こる。1946年に出された見解は
アメリカ（小麦）と比べて農家の生産性が著しく低い（資料⑨）、米自体が悪いのではないので「特定の日には有難く頂戴してよい」（資料⑩）、二本立て主食のメインは玉蜀黍が最適（資料⑪）。

3. 食生活改善の歴史的意義

①食生活改善の原理

- ・米が足りないから麦類（大麦、小麦）を入れた。しかし、米不足が解消したとしても米食中心に戻るわけにはいかない→「**粒食から粉食へと転換**しなければいけない」（資料⑫）。
- ・なぜ粉食にしなければならないのか→「国民体位の向上」「麦類の消費増進と重大な関係にある蛋白、脂肪資源の普及活用…」という認識（資料⑬）。

②外米輸入の不評

- ・週に1、2度。内地米と混ぜるとしても3：7が限度、ヤミ米を買わないとするとパン、うどんを導入（資料⑭）。
- ・外米は単価が高く、輸入するならば小麦の方が安い。小麦輸出国は過剰に悩んでいる（資

料⑮)。

③米麦転換問題

・政府が組織した食料対策協議会は、1954年7月に米輸入を小麦輸入に切り替える方針を採択し政府に答申(資料⑯)。

・この資料の内容で注目したい言葉

「米穀の供給源である**領土**の相当部分を失った」

「極力国内食糧の増産に努めて**自給度**を向上」

「食生活を改善」

「輸入食糧を削減」

この結果、できあがったのが、アメリカの「余剰農産物処理法」に基づいて小麦を輸入し「見返り資金」で国内農業開発を行う、という戦後の食糧輸入体制。

・「アメリカの余剰農産物を引き取るために学校給食やキッチンカーでパン食を奨励された」という見解は、一面では正しいが、当時の日本の選択肢は

外米を輸入するか小麦を輸入するか

であり、前者は粒食を続ける(≒発展途上国型の食糧消費)ことになるので、後者の粉食(先進国型の食糧消費)を選択した、というのが重要な点である。

おわりに

・余剰農産物処理法に乗ることによって安い輸入小麦が大量に入り、国内の小麦生産は衰退した。その意味では「自給度の向上」は果たせなかった。しかし、現在のTPP参加論は、「日本の米作りはコストが高い」という1点を過大に問題視しているという点で、戦後直後の食糧問題の議論よりも程度が低い。少なくともかつての食糧問題論議では

国民の栄養

国際収支(貿易収支)

国家財政

が総合的に問題にされていた。

<参考文献>

*資料プリントにないもの

岸康彦『食と農の戦後史』日本経済新聞社、1996年

鈴木猛夫『「アメリカ小麦戦略」と日本人の食生活』藤原書店、2003年

高嶋光雪『日本侵攻アメリカ小麦戦略』家の光協会、1979年